

令和7年度 第64回米子市美術展覧会（市展）

部門別審査講評 及び 市展賞作品講評

【洋画】

審査講評：

残念ながら出品点数が少ない上に、もっと高レベルを目指せる作品が多い様に思われる。また、思い付きで描いている絵が散見される。技術的にも未熟さが見受けられ、今年度の日本画レベルの高さには遠く及ばない。特にこれからの人たちにはもっと奮起して欲しいと切に思う。

（評者：倉鋪 悠）

市展賞：仙波 明《輝く先へ》

小品ながらよくまとまっている。構成力があり、木製の階段を登って行く先の光の向こうにはどんな景色が現れてくるのだろうか。

（評者：倉鋪 悠）

市展賞：和田 啓子《仲よく》

二人の子供の表情がよくとらえられている。この二人の少年が飛ばす飛行機の飛んで行く先にはどんな未来が待っているのだろうか。

（評者：倉鋪 悠）

【日本画】

審査講評：

日本画の出品数は減っているのに、レベルは毎年あがっていると感じました。色の美しさ、マチュール（題材、材料）のおもしろさなどです。高齢化や、時代の流れを抱える問題は多いのですが、新人増と自由な画風の日本画の飛躍に来年の出品に期待しようと思います。中でも、市展賞の春原さんの作品は優れた色感と大胆な構成に加え、岩絵具の繊細な扱いが良かったと思います。

奨励賞の木村さん、徳永さんの作品は斬新的、独創的な手法で描かれ構図の確かさ、表現の豊かさ、色調の美しさを感じたので決定しました。

（評者：西尾 克己）

市展賞：春原 敦子《牡丹》

光を感じさせる明るい画面が印象的です。歯切れ良いタッチと色遣いの巧みさが瑞々しさをもたらしています。牡丹の見事な写生が素晴らしく香りや生気まで感じられるほど丹念に描き込まれていて、鑑賞する側から意欲的に取り組んでおられる姿勢が感じられました。

（評者：西尾 克己）

【書道】

審査講評：

今年度は昨年より８点多い出品数で嬉しく感じました。全体にレベルが拮抗し、審査に苦労しましたが、中にはもう少し書き込まれたらと感じる作品もありました。また今回は篆刻、漢字仮名交り文の書が少なくなったことは残念です。

（評者：藤山 雅鳳）

市展賞：金田 芳州《陶淵明詩》

線の強さにまず目をひかれ、迫力を感じました。文字の構成もよく考えられて全体を良くまとめた作品に仕上がっていると感じました。

（評者：山田 龍香）

市展賞：仲田 旭豊《孤鳳吟》

良寛調の作品。すっきりした線條で、文字の中の余白の取り方、行間の広さに工夫が見られ爽やかな風が吹いてくる爽快感溢れる作品である。

（評者：森田 尾山）

市展賞：高川 海月《柿本人麻呂の詩》

仮名作品ではあるが、勉強されている藤原佐理の文字を駆使し、男手の仮名として流れの中にも力強さのある作品である。

（評者：中澤 秀月）

【写真】

審査講評：

応募者、作品数ともに増えたことは良い傾向です。全体的に作品内容の向上が見られるものの、もう少しアートとしてのクオリティの高い表現を目指して欲しい。あと、タイトルに一考を要する作品、額装に工夫が必要な作品も見受けられます。

(評者：審査員一同)

市展賞：和田 稔《おもかげ》

2枚組写真で感情表現がキラキラとまぶしい作品と言えます。右側の電球色に照らされた工場内や、裏道の雰囲気と左側の人物写真との対比が良い。

(評者：審査員一同)

市展賞：日置 祥二《新年の平穏を祈る》

和田浜のトンド行事を大変ダイナミックに表現され素晴らしい作品です。いにしえから伝わる神々の神事の情景が垂れ下がる暗い雲と、砂と草の波打つ形が大いに盛り上げている。

(評者：審査員一同)

【工芸】

審査講評：

工芸の素材が多岐に渡り、特に布を扱う作品が皆無。中々若い方々の出品がない。各カルチャーの生徒さんが若い方は入ってこない。出品作の中では新しく目を引くものもある。

(評者：安藤 釉三)

市展賞：武良 理絵子《上下天光》

ランプシェードとランプベースのバランスが良く、全体的なフォルムがすっきり出来ている。細くカットしたガラスを電気炉で波状に曲げ単純な線に変化をつけているところにもオリジナリティを感じさせる。

(評者：大谷 治)

市展賞：高塚 俊蔵《火の鳥》

作品を見させて頂き、自分には出来ない作品。特によく切り込まれ、見れば見る程感心する作品。良く出来ています。

(評者：安藤 釉三)

【彫刻】

審査講評：

一般出品者2名と数としては寂しいですが、2点とも細部まで丁寧に仕事がされた作品です。とても発想が面白く、作品のタイトルを見ると「なるほど」と納得してしまいました。ただ、難をいえば、もうこれ以上の表現はないのだろうか、もう一度形にする前に再考すると、もっと素敵な作品に仕上がると思います。来年も期待しています。

(評者：永江 靖幸)

【デザイン】

審査講評：

デザインには、自身や社会が抱えることをテーマに、どのような切り口で伝えていくかという面白さがあり、さらに「ああ、そうだよね」とより多くの共感を得るという目的があります。今回もイラスト作品が多い中、同じ手描きでも描き込まれたり構図がすばらしかったりと、目を惹く作品が多かったように思います。ただ飛び出てこれというものはなくどれも甲乙つけ難いのですが、デザイン部門であるからには、タイトル含め「メッセージ性」「ストーリー性」を重視し、混沌とした「何か」にあえて目的を与え、探究心と好奇心が感じられる作品を選出しました。

(評者：高田 雪枝)

市展賞：本田 愛佳《耽溺》

「観賞者へ投げかけていることは何か」を模索することに困難さがあり、また、耽溺というタイトルについて作者自身が制作に向かう行為そのものを指しているのか、それとも他に何か意図があるのかを考えてしまう曖昧さは否めませんが、全体の描画力、モノクロとカラーの世界観という構造、モチーフの流れが魅力的であることがそれを助けてくれました。背景の波や魚など細かくデザインされていてついつい惹き込まれていきます。大変興味深い作品でした。

(評者：高田 雪枝)